６年生のみなさんへ

残念なことに、休業期間が延びてしまいました。みんなと会いたかったのに・・・。授業したかったのに・・・。クラスでレクしたかったのに・・・。と悲しい気持ちでいっぱいです。

ただ、時間には限りがあります。６月から再開されるとしても、二ヶ月分学習が遅れてのスタートになってしまいます。だから、みなさんには、教科書を見て、できるところまで学習を進めておいてほしいのです。「継続は力なり」こつこつ頑張ったことは決して無駄になりません。家にいてばかりで、嫌になることも多いでしょうが、一緒に頑張りましょう！

次からは、国語「帰り道」ワークシートのヒントです。物語の読み取りをするときには、登場人物の気持ちが書かれているところに、線をひいていくといいですよ！

6年 国語

3

物語文を読む時は、登場人物の気もちを追いながら読み進めよう。

帰り道

教科書に色をかえて線をひいてみよう。

登場人物の気持ちが書かれているところ。

相手のことについて思っていること。 律↓周也 周也↓律

自分の性格など、自分のことについて思っていること

場面

放課後の玄関口

昼休みのこと

天気雨前の帰り道

1

放課後のさわがしい玄関口で、いきなり、周也から「よっ。」と声をかけられて、どきっとした。

「あれ。周也、野球の練習は。」

「今日はなし。かんとく、急用だって。」

うわばきをぬぎながら周也が言って、くつしたにぽっかり空いた穴から、やんちゃそうな親指をのぞかせた。その指をスニーカーにおさめても、周也はなかなか歩きだそうとしない。どうやら、いっしょに帰る気のようだ。

小四から同じクラスの周也。家も近いから、周也が野球チームに入るまでは、よくいっしょに登下校をしていた。なのに、今日のぼくには、周也と二人きりの帰り道が、はてしなく遠く感じられる。

もたもたとくつをはきかえて外へ出ると、五月の空はまだ明るく、グラウンドに舞う砂ぼこりを西日がこがね色に照らしていた。

「ああ、腹へった。今日の夕飯、何かなあ。あしたの給食、何かなあ。」

「な、律。昨日の野球、見たか。」

「夏休みまで、あと何日だったっけ。」

周也の話があちこち飛ぶのは、いつものこと。なのに、今日のぼくにはついていけない。まるでなんにもなかったみたいに、周也はふだんと変わらない。ぼくだけがあのことを引きずっているみたいで、一歩前を行く紺色のパーカーが、どんどんにくらしく見えてくる。

今日の昼休み、友達五人でしゃべっているうちに、「どっちが好き。」って話になった。「海と山は。」「夏と冬は。」「ラーメンとカレーは。」「歯ブラシのかたいのとやわらかいのは。」——みんなで順に質問を出し合い、「海。」「山。」「海。」と、ぽんぽん答えていく。そのテンポに、ぼくだけついていけなかった。「どっちかなあ。」とか、「どっちもかな。」とか、一人でごにょごにょ言っていたら、周也が急にいらついた目でぼくをにらんだんだ。

「どっちも好きってのは、どっちも好きじゃないのと、いっしょじゃないの。」

先のとがったするどいものが、みぞおちの辺りにずきっとささった。そんな気がした。そのまま今もささり続けて、歩いても、歩いても、ぶり落とせない。

返事をしないぼくに白けたのか、周也の口数もしだいに減って、大通りの歩道橋をわたるころには、二人してすっかりだまりこんでいた。階段をのぼる周也と、ぼくとの間に、きょりが開く。広がる。ここ一年でぐんと高くなった頭の位置。たくましくなった足どり。ぼくより半年早く生まれた周也は、これからもずっと、どんなこともテンポよく乗りこえて、ぐんぐん前へ進んでいくんだろう。

2

何もなかったみたいにふるまえば、何もなかったことになる。そんなあまい考えをすてたのは、校門を出てから数分後、最初の角を曲がった辺りだった。どんなに必死で話題をふっても、律はうんともすんとも言わない。背中に感じる気配は冷たくなるばかり。やっぱり、律はおこってるんだ。そりゃそうだ。

昼休み、みんなで話をしていたとき、はっきりしない律にじりじりして、つい、言わなくてもいいことを言った。軽くつっこんだつもりが、律の顔を見て、重くひびいてしまったのが分かった。まずい、と思うも、もうおそい。以降、絶対にぼくの顔を見ようとしない律のことが気になって、野球の練習を休んでまで玄関口で待ちぶせをしたのに、いざ並んで歩きだすと、気まずいちんもくにたえられず、またべらべらとよけいなことばかりしゃべっている自分がいた。

「この前、給食でプリンが出てから、もうずいぶんたつよな。」

「むし歯が自然に治ればなあ。」

「山田んちの姉ちゃん、一輪車が得意なの、知ってたか。」

何を言っても、背中ごしに聞こえてくるのは、さえない足音だけ。ぼくがしゃべればしゃべるほど、その音は遠のいていくような気がする。

ふいに母親の小言が頭をかすめたのは、下校中の人かげがあっちへこっちへ枝分かれして、道がすいてきたころだった。

「周也。あなた、おしゃべりなくせして、どうして会話のキャッチボールができないの。会話っていうのは、相手の言葉を受け止めて、それをきちんと投げ返すことよ。あなたは一人でぽんぽん球を放っているだけで、それじゃ、ピンポンの壁打ちといっしょ。」

ピンポン。なんだそりゃ、とそのときは思ったけど、今、こうして壁みたいにだまりこくっている律を相手にしていると、その意味が分かるような気がしてくる。たしかに、ぼくの言葉は軽すぎる。ぽんぽん、むだに打ちすぎる。もっとじっくりねらいを定めて、いい球を投げられたなら、律だって何か返してくれるんじゃないか。

でも、いい球って、どんなのだろう。考えたとたんに、舌が止まった。何も言えない。言葉が出ない。どうしよう。あわてるほどにぼくの口は動かなくなって、逆に、足は律からにげるようにスピードを増していく。

場面

放課後の玄関口

昼休みのこと

天気雨前の帰り道

天気雨前の帰り道

はぁ。声にならないため息が、ぼくの口からこぼれて、足元のかげにとけていく。どうして、ぼく、すぐに立ち止まっちゃうんだろう。思っていることが、なんで言えないんだろう。ぼくは海のこんなところが好きだ。山のこんなところも好きだ。その「こんな」をうまく言葉にできたなら、周也とちゃんとかたを並べて、歩いていけるのかな。「どっちも好きじゃない」がいっしょなら、「言えなかったこと」と「なかったこと」もいっしょになっちゃうのかな。考えるほどに、みぞおちの辺りが重くなる。

市立公園内の遊歩道にさしかかったころには、ぼくは周也に三歩以上もおくれをとっていた。もうだめだ。追いつけない。あきらめの境地でぼくは天をあおいだ。信じがたいものを見たのは、そのときだった。

空一面からシャワーの水が降ってきた。

もちろん、そんなわけはない。なのに、なぜだかとっさにプールの後に浴びるシャワーがうかんだのは、公園の新緑がふりまく初夏のにおいのせいかもしれない。

「うおっ。」

「何これ。」

頭に、顔に、体中に打ちつける水滴を雨と認めるのには、少し時間がかかった。晴れているのに雨なんて、不自然すぎる。ぼくと周也はむやみにじたばたし、意味もなくとんだりはねたりして、またたく間に天気雨が通り過ぎていくと、たがいのぬれた頭を指さし合って笑った。

本当に、あっというまのことだったんだ。ざざっと水が降ってきて、何かを洗い流した。周也の気どった前がみがぺたっとなったのがゆかいで、ぼくはさんざん腹をかかえ、気がつくと、みぞおちの異物が消えてきた。

単純すぎる自分がはずかしくなったのは、笑いの大波が引いてからだ。うっかりはしゃいだばつの悪さをかくすように、ぼくはすっと目をふせた。アスファルトの水たまりに西日の反射がきらきら光る。そのまぶしさに背中をおされるように、今だ、と思った。今、言わなきゃ、きっと二度と言えない。

「ぼく、晴れが好きだけど、たまには、雨も好きだ。」

勇気をふりしぼったわりには、しどろもどろのたよりない声が出た。

「ほんとに両方、好きなんだ。」

周也はしばしまばたきを止めて、まじまじとぼくの顔を見つめ、それから、こっくりうなずいた。周也にしてはめずらしく言葉がない。なのに、分かってもらえた気がした。

「行こっか。」

「うん。」

ぬれた地面にさっきよりも軽快な足音をきざんで、ぼくたちはまた歩きだした。

天気雨の間

無言のまま歩道橋をわたった先には、しかも、市立公園が待ち受けていた。道の両側から木々のこずえがたれこめた通り道。人声も、車の音も、工事の騒音も聞こえない緑のトンネル。ぼくはこの静けさが大の苦手だった。

正確にいうと、だれかといるときのちんもくが苦手だ。たちまち、そわそわと落ち着きをなくす。何か言わなきゃってあせる。野球チームに入る前、律とよくいっしょに帰っていたころも、ぼくはこの公園を通りかかるたび、しんとした空気をかきまぜるみたいに、ピンポン球を乱打せずにいられなかった。律のほうはちんもくなんてちっとも気にせず、いつだって、マイペースなものだったけど。

そっと後ろをふり返ると、やっぱり、今日も律はおっとりと一歩一歩をきざんでいる。まぶしげに目を細め、木もれ日をふりあおぐしぐさにも、よゆうが見てとれる。ぼくにはない落ち着きっぷりに見入っていると、とつぜん、律の両目が大きく見開かれた。

なんだ、と思う間もなく、ぼくのほおに最初の一滴が当たった。大つぶの水玉がみるみる地面をおおっていく。天気雨―頭では分かっていながらも、ピンポン球のことばかり考えていたせいか、空からじゃんじゃん降ってくるそれが、ぼくの目には一しゅん、無数の白い球みたいにうつったんだ。

ぼくがむだに放ってきた球の逆襲。「うおっ。」と思わずとび上がったら、後ろからも「何これ。」と律の声がして、ぼくたちは全身に雨を浴びながら、しばらくの間ばたばたと暴れまくった。はね上がる水しぶき。びしょぬれのくつ。たがいのあわてっぷり。何もかもがむしょうにおかしくて、雨が通りすぎるなり、笑いがあふれだした。律もいっしょに笑ってくれたのがうれしくて、ぼくはことさらに大声をはり上げた。

はっとしたのは、爆発的な笑いが去った後、律が急にひとみを険しくしてつぶやいたときだ。

「ぼく、晴れが好きだけど、たまには、雨も好きだ。ほんとに両方、好きなんだ。」

たしかに、そうだ。晴れがいいけど、こんな雨なら大かんげい。どっちも好きってこともある。心で賛成しながらも、ぼくはとっさにそれを言葉にできなかった。こんなときにかぎって口が動かず、できたのは、だまってうなずくだけ。なのに、なぜだか律は雨上がりみたいなえがおにもどって、ぼくにうなずき返したんだ。

「行こっか。」

「うん。」

しめった土のにおいがただようトンネルを、律と並んで再び歩きだしながら、ひょっとして――と、ぼくは思った。投げそこなった。でも、ぼくは初めて、律の言葉をちゃんと受け止められたのかもしれない。

天気雨前の帰り道
天気雨の間
天気雨の後

（うらに例があります。参考に。例は全部かいてはいません）

帰り道ワークシート①

名前（　　）

☆教科書を読んで、場面ごとの律と周也の気持ちを考え、書きましょう。ヒントは、1は、律の視点から、2は、周也の視点から書かれているということです。

1をひいたところをもとに考えるといいです。

場面	昼休み	放課後のげん関口	天気雨の前の帰り道	天気雨の間	天気雨の後
気持ち、心情、考えていたこと					
律	1をひいたところ ・みんなのテンポにぼくだけついていけなかった。 ・先のとがったするどいものが、みぞおちの辺りにずきっとささった。そんな気がした みぞおち 胸骨の下あたり こんだところ	・周せはどうやら いっしょに帰る気のようで ・周せと二人きりの帰り道がはてしなく遠く感じられる。 ・ぼくだけが ひきずっているみたい。	・どうして、ぼく、すぐに立ち止まっちゃうんだろう。思っていることが、なんで言えないんだろう。 ・言えなかったこと、とってなかったこと、もいっしょになっちゃうのかな。 ・もうだめだ。追いつけない。	・空一面からシャワーの水が降ってきたように感じた。 ・晴れているのに雨なんて不自然だ。 ・ざざっと水が降ってきて、何かを洗い流した気がした。 ・みぞおちの異物（もやもや気にしていたこと）が消えてきた。	・単純すぎる自分がはずかしい。 ・西日がきらきらしているのが自分の背中をおしてくれているようで、今、思ったことを言うしかない。 ・周せに分かってもらえた気がした。 ・さっきよりも軽快な足音 （周せに分かってもらえて、気もちが軽くなった。）
周也	言わなくていいことを言ってしまった。 ・軽くつっこんだつもりが、律の顔を見て、重くひびいてしまったのが分かった。まずい。	・何もなかったみたいにふるまえば、何もなかったことになると思っていたけど、あまかった。 ・やっぱり律はおこっているんだな。	・ぼくの言葉は軽すぎる。ぼんやりとだに打ちすぎる。もっとじっくりねらって定めていい球を投げられたら、律だって何か返してくれるんじゃないか。 ・いい球って何か考えたら 言葉が出なくなった。 ・静けさが苦手だ。	空からじゃんじゃん降ってくる雨つぶが、無数の白い球みたいにうった。 ・たかいのあわてっぷりがむしょうにおかしくて、笑いがあふれ出した。 ・律もいっしょに笑ってくれたのがうれしい。	（律の言っていること） ・たしかに、そうだ。 ・ぼくは初めて、律の言葉をちゃんと受け止められたのかもしれない。

5/14

帰り道ワークシート②

5/15

名前（　　）

☆教科書を読んで答えよう。律と周也は、どんな性格で、どんな考え方をする人なのか、□の中の言葉を参考に想像してみよう。

たくましい　おおらか　おっとり　しんちょう　まっすぐ　落ち着き　正直
おくびょう　おだやか　たのもしい　明るい　活発　おっちょこちょい　冷静
あわてんぼう　おしゃべり　マイペース　ひかえめ　気弱　消極的　積極的

（一）「律」の人物像を考えましょう。

・「律」から見た「律」

キーワード　みんなのテンポをひいたところをもとに、1の、みんなのテンポについていけずに立ち止まってしまう所がある。思ったことがうまく言えないことがある。

・「周也」から見た「律」

キーワード　はっきりしない、マイペース、よゆう、落ち着き　2の一をひいたところ　はっきり言わなくて、じりじり感じるような所があるけど、マイペースで、落ち着きがある。

・あなたから見た「律」→自分が読みとった「律ってこんな子かな？」というのを書く。

・一文で「律」の人物像をまとめましょう。

（例）マイペースでおっとりしている。

（二）「周也」の人物像を考えましょう。

・「周也」から見た「周也」

キーワード　ぺらぺらとよけいなことばかりしゃべる。言葉が軽い。ちんもくが苦手。　2の〜をひいたところ　ちんもくやしんとした空気が苦手で、ぺらぺらとよけいなことばかりしゃべる軽いところがある。

・「律」から見た「周也」

キーワード　やんちゃそう　話があちこち飛ぶ。たくましくなった。ぐんぐん進んでいきそう。　1の一をひいたところ　おしゃべりで、どんなことでもテンポよくのりこえていくたくましさがある。

・あなたから見た「周也」→自分が読みとった「周也ってこんな子かな？」というのを書く。

・一文で「周也」の人物像をまとめましょう。

（例）明るく活発で、おしゃべりなところがある。